



Title	近代を中心とした助数詞の通時的研究
Author(s)	伊藤, 由貴
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51854
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 伊 藤 由 貴 ）	
論文題名	近代を中心とした助数詞の通時的研究
論文内容の要旨	
本論文では現代語の助数詞の体系がどのようにして形成されてきたのかの一端を明らかにすることを目的とし、近代を中心として個別的な助数詞や事物を取り上げ、通時の研究を行った。各章の概要は以下の通りである。 序章では、助数詞の研究にあたって近代を取り上げる意義を述べた上で、「包括的助数詞」「個別的助数詞」という概念や助数詞の使用における位相差など、重要な先行研究の指摘を取り上げ、本論文における助数詞の捉え方を示した。 第1章と第2章では近代に広く使われるようになった助数詞で中国語の量詞に由来するものに焦点をあて、どのようにして日本語の中に受容されてきたのかを考察した。 第1章では行為や出来事を数える助数詞「回」を取り上げた。「回」にどのような振り仮名が付されるかといったことや、どのような基数詞と結びついているのかという生産性を観点として用いながら、資料の位相ごとに考察を行った。「回」は近世に入ると文学作品では白話小説の影響が強いジャンルで多くの用例が見られるようになるが、多くは「たび」という振仮名が付され、生産的な助数詞として使用されているわけではなかった。その一方で、漢文訓読体で書かれた科学書では、生産性が高い状態で用いられていたことを指摘した。そして、近代に入ると、硬い文体のものに多く用例が見られる傾向があるものの、話し言葉でも行為や出来事を数える助数詞として「回」が使用されはじめ、生産性も高いことを示した。また、現代において「度」は生産性が低いとその傾向は近代から見られ、「度」の生産性の低下によって「回」の使用が広まった可能性を指摘した。 第2章では現在、無生物において幅広く使用される助数詞「個」を取り上げる。ここでは、第1章で用いた観点に加えて、中国語の量詞「個」は日本語の「個」とは異なり有生物や無生物を問わず使用されることから、数える対象が有生物か無生物かにも着目しながら考察を行った。「個」も近世に入ると白話小説の影響が強い文学作品で用例が多く見られるものの、「つ」「（た）り」と振り仮名が付されており、「個」としては定着していなかったと見られることを示し、その一方で、科学書では漢文訓読体の文章で用例が見られ、10以上の数での用例があることから助数詞「個」として用いられていた可能性が高いことを指摘した。そして、近代に入ると有生物を数える用法は生産性を失うが、無生物を数える用法は生産性が高い状態で使用されていることを指摘した。また、「個」は「つ」に比べて文語体で多く使用される傾向にあり、近代における「個」は書き言葉での使用が中心で、口頭で使用される場合であっても硬い語感を持っていたと推測されることを述べた。 そして第1章と第2章の調査結果から、「回」や「個」の受容においては、どちらも近世の文学作品には多く用いられるものの、科学書に見られたような唐話の影響がうかがえる漢文訓読体の文章からの流れが、より重要だったのではないかと考えられることを指摘した。 第3章、第4章では助数詞「個」の変遷を通時的に調査・考察した。助数詞「個」は近年用法が拡大しているということが複数の研究で指摘されているが、実際の用例に基づいて用法の拡大を示したものはほとんどなく、「個」が広く使われはじめた近代の用例を見ると現代よりも広い用法で用いられているように見える。そのため、「個」の変遷を実際の用例に基づいて明らかにする必要があると考えた。 第3章では、助数詞「個」が近代においてどのように使用されていたのかについて、新聞を主な資料としながら考察した。その結果、先行研究では「個」は元々具体物を数えるものであるという前提で議論が進められることが多いものの、近代における「個」は抽象物にも多くの用例が見られ、無生物であれば、具体物・抽象物を問わず、幅広く使用できたことが明らかになった。また、近代の「個」には、個別的助数詞が使用されないものや周辺的なものに使	

用するという“complement function”があることが確認でき、無生物という範疇における包括的助数詞としての性質を持っていたと考えられることを指摘した。

第4章では、第3章の結果を受けて助数詞「個」の範疇が近代から現代にかけて、どのような変遷をたどったのかについて考察した。新聞の調査の結果、「個」は近代においては無生物で広く使用できたと考えられるが、1940年代頃から「個」の使用が具体物に偏るようになったということを明らかにした。しかし、戦後の国会会議録では「個」が具体物・抽象物を問わず使用されていることから、「個」は近代以降、位相に違いはあれど常に無生物の包括的助数詞として機能していたと見られることを示した。また、戦後の「個」に対する言及からは、近代には書き言葉を中心として使用されていた「個」が話し言葉で多用されるようになったことがわかり、話し言葉における包括的助数詞が「つ」から「個」へと移行していく流れが想定されることを述べた。一方で、「個」を包括的助数詞として使用しない人々の違和感を生み、「個」に関する規範意識が形成された可能性があることを指摘した。また、先行研究で指摘される用法の拡大はこの包括的助数詞の「つ」から「個」という流れが一因であると考えられることにも言及した。

第5章から第7章では、助数詞が事物の変化に伴って変遷するということを踏まえて、近代において大きく変わった事物として乗り物に着目し、乗り物に関わる助数詞について扱った。

第5章では、現在、乗り物という範疇における包括的助数詞として使用される助数詞「台」について取り上げた。「台」を、台を数える用法、機械を数える用法、乗り物を数える用法を持つ多義語として考えると、近世では台を数える用法しか確認できず、機械を数える用法と乗り物を数える用法は近代に入って広まった、もしくは獲得されたと見られることを指摘した。また、機械を数える用法と乗り物を数える用法ではその用法の浸透の仕方に違いがあり、機械はそれ以前に専用される助数詞を持たなかったと見られることから、「台」が機械に適用されるようになると、そのまま「台」が機械を数える主たる助数詞となっていくが、乗り物の場合は、以前から使用されていた「輛」と並行して使用されるようになるということを示した。

第6章では、助数詞「台」がどのような変遷を経て乗り物という範疇における助数詞になったのかを、新聞での用例から考察した。考察にあたっては乗り物における個別的助数詞として「輛」「機」「隻」「艘」に着目し、それらと「台」がどのような関係にあるのかを見ながら、その変遷を追った。当初「輛」と「台」は自転車や自動車、機関車など多様な車で併用され、乗り物においては上位範疇・下位範疇という関係ではなかった。しかし、飛行機に「台」が用いられるようになることで「台」は範疇を広げ、その結果「輛」は「台」の下位範疇となり、そこから「輛」は更に範疇を狭めたことを示した。また、飛行機には当初「個」や「台」が使われていたが「機」が徐々に割合を伸ばしていったことを示した。船を数える助数詞に関しては、一見、近世以降変化が無いように見えるが、話し言葉が反映されると見られる国会会議録では戦後すぐに船を「台」で数える用例が見られることから、乗り物における包括的助数詞「台」と個別的助数詞「隻」「艘」という関係が生まれていたと考えられることを指摘した。

第7章では、飛行機を数える助数詞「機」がどのようにして成立したのかについて考察した。「機」は現在どの先行研究でも助数詞として認定されているが、成田（1990）では飛行機という名詞との関連が示唆されている。名詞から助数詞が生成される可能性は複数の先行研究で述べられる一方で、助数詞と名詞の境界をどう設定するかということは現在も議論の対象となっている。新聞の用例による調査から、近代においては「機」が単独で名詞として機能していたため、「基数詞+機」の初期の用例は「基数詞+名詞」と分析できることを指摘した。その上で、先行研究で用いられる名詞と助数詞の区別の方法について考察し、基数詞と複合して副詞的用法を持つことを助数詞として使用されているかどうかの一つの基準と見ると、1920年代には「機」が助数詞として使用されていたと見られることを示した。そして、「基数詞+名詞」は漢語において自然な造語法で、近代ではよく見られる表現であり、「基数詞+名詞」という表現から助数詞ができるのは助数詞の造られ方の一つのパターンであったと考えられることを述べた。

終章では第1章から第7章までをまとめた上で、助数詞の研究を進めるにあたって、その出自や変遷の多様性、位相差といった重層性を捉えることの必要性について述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (伊 藤 由 貴)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	岡島昭浩
	副 査	大阪大学 教授	金水 敏
	副 査	大阪大学 准教授	矢田 勉
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 近代を中心とした助数詞の通時的研究

学位申請者 伊藤 由貴

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 岡島昭浩

副査 大阪大学教授 金水 敏

副査 大阪大学准教授 矢田 勉

【論文内容の要旨】

本論文は日本語の助数詞について、近代を中心に通時的に研究したものである。日本語の助数詞については、従来、現代語を中心として、構文上の問題の研究や、認知意味論的な研究などが進められて来たとし、また、古文書等の歴史的文献における使用の記述も進められているが、現代語に直結する近代語の助数詞についての研究が手薄なまま、現代語の助数詞の来源が語られるような現状があり、申請者はそれを打破すべく研究に取り組んだものである。

「第 1 章：助数詞「回」の受容」では、行為や出来事を数える助数詞「回」を取り上げ、これが中国語から、白話小説の訓読・翻訳を通して多く使われるようになったことを示した。白話小説の影響が強いジャンルで多くの用例が見られ、また漢文訓読体で書かれた科学書に見られる状況であったのが、近代に入ると話し言葉でも使用されはじめ、次第にその使用を増やして行くことを、「度」と比較しながら示している。

第 2 章から第 4 章では「個」を取り上げている。近世期、「回」と同様に白話小説の影響が強い文学作品で用例が多く見られるものの、ここでは漢字表記にとどまっていた。また、有生のものにも使えるなど、中国語らしさを残すものであったが、近代になると無生のものを数える用法が、高い生産性を持って使用されていることを指摘している。これが、「第 2 章：助数詞「個」の受容」である。近代における「個」は書き言葉での使用が中心で、口頭で使用される場合であっても硬い語感を持っていたと推測されることも示しているが、その用法が拡大している、と言われることについて、書き言葉と口語の差を意識しつつ考察したのが「第 3 章：近代における助数詞「個」の用法」「第 4 章：近代～現代における助数詞「個」の用法」である。

第 5 章から第 7 章では、近代において大きく変わった事物として乗り物に着目し、乗り物に関わる助数詞について扱っている。「第 5 章：助数詞「台」の発達」では、乗り物に加えて機械についても「台」を使うようになった理由について、先行研究での仮説（ガソリン自動車の出現を契機とする）を否定することになる調査結果（機械を数える用法と乗り物を数える用法は近代に入ってから同時期に広まった）を示した。「第 6 章：近代～現代における乗り物を数える助数詞」では、当初「輛」と「台」は乗り物において上位範疇・下位範疇という関係ではなかったが、飛行機にも「台」が用いられるようになることで「台」が範疇を広げ、その結果「輛」が「台」の下位範疇となったことを示した。「第 7 章：助数詞「機」の成立」は、飛行機を数える助数詞「機」がどのようにして成

立したのかについて考察したもので、近代においては「機」が単独で名詞として機能していたため、初期の用例は「基数詞＋名詞」と分析できることを指摘した。その上で、1920年代には「機」が助数詞として使用されていたと見られることを示した。基数詞と複合して副詞的用法を持つことがあれば助数詞として使用されていると見なす、という基準で見たものである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、従来、現代語の使用者による内省と、簡略な調査だけによって語られてきた、現代の助数詞の源流について、実際の資料にあたって用例を採集して論じようとしたもので、実際の用例を集めて論じた結果、よい結果がもたらされたものである。

「個」についてしばしば言われるような、具体物から抽象物への拡大が近年の変化にはある、という捉え方は、近代語の使用状況を調査すると、単純な話ではないことが明らかにされた。すなわち、近世期においては「個」は、表記面だけではあるが、中国語と同様に、人を含めた有生のものをも指すことがあったのが、明治頃には有生のものには使用されず、無生のものであれば、具体物・抽象物を問わず、幅広く使用されていたのである。それが、1940年頃からは具体物に偏るようになった様子も示された。これは現代語の規範意識と通じるもので、新聞での用例調査では、近年の用法拡大は見出せない。そこで申請者は、国会会議録の用例を収集したが、昭和二十年以前の帝国議会議録は文字列の検索が出来ないため、戦後のみの調査に終わってしまい、新聞用語との位相差を十分には検討できていない恨みが残った。とはいえ、戦後の国会会議録では「個」が具体物・抽象物を問わず使用されていることが示されたのは大きな成果である。一方で、「個」を抽象物に使うことに対する違和感を表明した文献を集め、そこから見えてくる規範意識がどのようなものであり、どのように形成されたのかを、使用の実態を照らし合わせながら探ろうとしていることも評価できる。

資料がデータベース化された新聞を中心にしているのが難点ではあるが、そうした資料の性質を生かして、膨大な近代語資料の中から必要な用例を拾い上げ、それを単に計量的に利用するのではなく、文脈にあたって用例を確認していることも伺え、安易な用例収集に終わっているわけではない。

また、ほんの少し前の日本語について多くの人が感じていることが、実際の当時の日本語の状況とは違うものであるという事態が厳に存在することを、「個」「台」などの用例調査によってしっかりと示したのも意義深い。

以上の諸点をふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。